

俳句雑誌[おき]

12月号

能村

研三

浜	和	秋	潮	
菊	蝋	寂	錆	
の	燭	び	の	
断	め	Ø	八	
崖	<	潮	丈	
咲	灯	嗚	す	
き	台	り	す	
を	に	通	き	
矜	秋	す	大	
恃	惜	小	揺	
٢	L	笹	れ	
す	む	垣	す	

訪問した。 日十月二十四日に岩手県の大槌町を 3・11から八か月が経ったが、先

果たしていたそうだ。かつて俳句を 野を抜けて沿岸部の釜石に向かっ り、片道六百五十キロの道のりを交 千葉から車で現地に行くことにな ら、この度の東日本大震災を受け、 地の災害復旧用のトラックの頻繁な 何か心が晴れなかった。途中は被災 たが、猿ヵ石川や六角牛山の風景は 作りに二三回訪れている遠野であっ 災直後はここがセンター的な役割を た。途中の遠野の道の駅で休憩、震 た。市民からの楽器もあったので、 費としてお渡しするのが目的であっ のチャリティコンサートを実施し多 募金」を創設した。これまでに八回 井上ひさし作品ゆかりの岩手県大槌 理事長が井上ひさしであったことか がて展開される悲惨な風景を思うと なつかしかったものの、この先にや 代で運転しながら現地入りをした。 の教育委員会に、図書や楽器の購入 くの義捐金が集まったため、大槌町 町を支援するために「吉里吉里支援 私たちは東北道を北上で降りて遠 私の勤める文化振興財団では、前

城ケ島・宮柊二歌碑

「石六」が刻みし歌碑や秋寂びぬ

糶了へし荷受け櫓の秋日影

過ぎたり秋の暮

半

生

を

風

と

秋

潮

に

帆

0)

反

り

あ

り

L

白

秋

碑

根に添はす結神籔

神

0)

留

守

木

0)

うたん島」の灯台デザインも決まり、 お会いした方々はどなたも明るく、 は、ひっそりとしていた。けれども、 けが整然と並んでいて、かつて車や 積まれ、各家々の土台と基礎部分だ た。住宅や商店街の瓦礫はまとめて して、しばし言葉を失ってしまっ かったかのように静まり、 に歩みを進めていることを強く感じ 町民のみなさんは力を合わせて確実 報道されたように、「ひょっこりひょ しいものがあるだろうが、新聞でも た。復興までの道のりには大変に厳 いただいたのではと思うほどであっ エネルギッシュで、こちらが元気を 人が行きかい活気にあふれた港町 せ、その甚大な被害を目の当たりに は山際ぎりぎりまで津波が押し寄 ころに大槌がある。海に面した平地 石から車で十五分くらい北上したと 津波の脅威を改めて知らされた。釜 釜石の駅があるところからは一変し 平穏を装っていたが、釜石製鉄所や の手前は地震の大きな被害もなく、 づき始めていた。釜石の街も沿岸部 通行があったが、山の中は何事も無 木々も色

能村 研三

朝

寒

B

大

書

き

さ

れ

L

寺

案

内

北 Ш

英

子

長 肩 十 背 受 鳥 居し 負 抱 渡 難 籠 る け 列 て呉れしやアポな 夜 に Щ ば 島 0) あ 河 失 颱 る 足 づきづき 意 が 風 拭 Ł ま 0) Z ま ح ぬ 活 影 れ < L 傷 け 小鳥た 支 L で だ 秋 鰯 Ł 5 5 雲 影 草 か け

杖 に 千 田 百

里

ま 後 海 い 祝

た け

ま 朝

る

背 壺

丈 に

秋

だ 露 恋

れ 丸

露

4

李 縮

0)

頬

れ 杖 に 鵜続にの調押 衣 を きせずレ B う 寄 に せ 7 鵜 モン < 0) 島 る 0) 去 夜 香 気 り を 秋 7 纏 秋 気 S

荒

鵜

寝 夜

ぬ

る 宴

は

銀

漢

0)

尾

た 難 け

n

長 É 疲 頬 歯

き

半

ば

に

7 惜

去 0)

り あ

礁

秋

惜 σ

み

秋

を

L

み

り

容

祝 辻

ち

ど 0)

だけ

湖

岬

0)

ح た

B き

夫

祭

如

<

鳴

子

0)

張

5 鷹

れ

に

水 月

0)

生 脈

き 空 伊

る に 良

に 銀

苦 河

正 す

祭

直

美

月 0) 道 宮 内 と L 子

山 月 赦 打 魂 夜 0) な 0) 旅 つ 虚 奥 き 波 0) 海 空 岬 B 疲 は に 奥 0) 海 れ 磯 S 風 と に と は 菊 0) 木 筋 低 花 日 < 月 す 実 き 低 目 0) す け 踏 に き り 道 ts.

月 星 鎮

た き 色

重

吉 \mathbb{H} 政 江

天 晚何 白 に 秋ヶ島吟行三句の実と 番 سک 高 秋 渋 り 碑 火 重 酒 秋 間 和[0) た 三 う 光 休 島 き 半 7 \sim 鼠 秋 色 規 び 日 向 と 管 Oは に < な あ 波 か じ つ る 風 ざし 荒 め 車 7 を る る き 知 け 基 L る る り

2 わ た る 田

澄

発

所 節 子

海 大 根

爽

鳴画の 1 な 潮 電 け か に 風 \exists 1 色 な 車 に る 0) B 飛 < 方 負 仏 水 ぶ る 眼 け 0) 底 ボ < 咲 h に 1 る Щ 気 き 似 岬 F, に を 0) 澄 7 セ 見 先 曼 森 2 す 師 珠 野 0) 1) わ 旬 沙 分 日 た 碑 華 中 矢

鹿 Ш ワ か 秋

秋

0)

色

大

Ш

ゆ

か

ŋ

小

鳥

0)

き

母

を

未

だ

に

頼

ŋ

花

虫 声

0)

か

前

Ш

桔 風 巻 梗 作 な 法 か 守 な か り 7 開 咲 か き め る 瓶 た \mathcal{O} 蓋 る

É 台

> らすうり 日 で 畜 ゆ 傘 頭 坂 と 0) ゆ ほ 黙 切 る ζ つ り ゆ 0) 7 る を 海 秋 秋 れ 0) 日 ば 0) ま 濃 いく 色 3 < な ŧ た り 0) な 7 り 7

秋 怒

秋 か 飛 1

濤

遠

藤

真

砂

明

鳴襛攩 4 釣 晴 島 り骨細の か 0) は Þ ょ た量陸 水 男 揚 つ り 男 平 が き げ 太 0) さ 線 海 0) 陽 h IJ \sim 拳 ズ ま \sim 出 引 ど \mathcal{L} 竿 尽 秋 大 つ き 鳴 根 怒 直 5 散 蒔 濤 す < る す 7

荒 井 千 佐 代 半 秋

来る け 夜 死 レク を 7 0) 0) 開 イエムミサ た 左 ク 雲 \langle 1 び 右 0) る エムミ に に 子 動 藷 揺 0) サ 蒸 れ 部 か 弾 す 屋 ぬ きを \prod 夕 菊 沈 月 れ ば 夜 む 雛

そ け き

か

辻 美 奈 子

残 か 秋 か 吾 折 な る た 蝶 亦 鶴 むけ 虫 紅 0) 0) か み 殖 つ 首 Ź そ に V <u>1</u> ゆ け 秋 色 0) そ ち き 0) さ 高 5 0) 日 あ L さ からつか 夫 傘 が てきし となりて を と る 恋 思 九 Z 月 \mathcal{O} 冬 V け 夕 母 か け る 焼 に り り な

鞍 上 谷

昌

憲

ど 秋 釣 鳶 島

秋

乗

高 Ш L 桔 L づ 梗 を 木 雲 覆 0) Z 夕 に 間 映 波 這 隠 松 Z あ れ ぼ 霧 り に 渚 湧 す 槍 뽄 け あ ケ り 原 り 岳

岩

天

一少

無 爽 尽 Þ 蔵 か と B は 乗 乗 鞍 を 鞍 統 0) 3 い 剣 わ 雲 峰

王

嶺

に L

雲

王

恋

茂

恋

L

と

小

鳥

来

る

陸

0)

台

ケ

1 ル 安 居 īF. 浩

> な 上 蔵 蔵

か

تع

段 0)

ボ

]

ル

行 れ

文 遊

祭

間

近

半

島

は

0)

先

ま

で

大

根

畑

う

ぜ

h

に ボ

触

な 進

ば

び 化

で

は

す

ま

め

秋 な

0)

ポ ま

ケ 先

段

秋 Щ ど 去 h に 0) 年 ぐり 虹 入 と 卓 る は 0 に二つ Ł 落 違 5 う Z てころ 霧 花 0) 濡 野 ミル げ れ 0) 7 0) フ 雨 拾 案 と イ は 内 な 1 る 板 ユ る n

干

菅

谷

た

け

L

陰

き 糸 は 0) 遍 に りとす 弧 を 潮 路 来 に 垂 退 満 7 雪 れ い 事 願 八 来 7 7 0) 丈 0) L 灯 秋 減 본 富 衣 り 台 思 士 と を た V を を り曼 き 陰 と 井 抱 < 干 \mathcal{O} り 珠 哀 L ぼ を け 沙 に 華 5 り り れ

蔵 王

杉 本 光

祥

ッ 風 剣 吉 O \vdash 岳 韋 多 湧 は 駄 き き 遠 チ 天 <u>寸</u> き 日 走 つ Щ ッ り 稲 と 丰 か 穂 な か な な 波 り

抜 け 道 細 \prod

洋 子

ゆ 天 Z 空 ぐ に れ 抜 は け 触 道 媒 な 0) か と り き 鳥 酔 芙 渡 蓉 る

人 待 5 顔 ح と さ 5 後 0) ح ろ ŧ が 豊

秋

0)

首

0)

据

n

赤

h

坊

星 膝 あ は ま 発 た 研 条 ぎ 秋 澄 気 ま さ を れ 上 7 野 る 分 女 あ と 坂

島 0 大 挟 橋 む 秋 潮 半 を 島 S 雁 ح 渡 跨 ぎ 1

半

島

城

ケ

風

岬

藤

原

照

子

橋 行 荒

灯 白 椿 台 秋 0) と 忌 実 近 安 落 房 L 5 島 0) 7 対 0) 弾 峙 碑 け B 露 7 秋 け 潮 L 風 路 B 岬

半

島

0)

浦

Þ

巡

り

秋

惜

L

t?

百 桐

葉

箱

発

光

体

لح

な

素

葉

昼

0)

月

ょ

り

は

が

れ

L

か

兀

半

世

紀

花

野

人

北

村

幸

子

秋

を

0)

ぶ

素 に

秋

B

帆

0) 桔

さ

ま

U

B

鮪

0)

目

玉

ほ

人ごとの

B

う

古

稀

き

7 り

白

梗 風

鰯 小 雲 流 椅 れ を 子 ぼ あ h n と ば ま 友 た 増 ぎ え 7 7 花 野 ゆ < λ

俳 す É

歴

0)

四

半

世

紀

B

実

ŧs

5 拳 型

さ

き ど 碑 時 此 石 嶺 代 処 線 仏 祭 に 0) σ 武 人 映 湍 士 住 え 身 0) み 7 ほ 世 L 秋 0) 7 証 日 い る B 0) ろ 曼 咲 す 豊 珠 < か 小 沙 な n り 菊 華 台

濁 音

磯 波 半 秋 を 惜 め と 白 千 尽 L \coprod

か < 脚 騒 居 に 秋 は 行 る O圳 < 宙 居 球 る 秋 に 0) は 嵌 と 鼓 ず ど め 動 ま 秋 7 秋 碑 る 0) 惜 忘 影 鳶 L 伸 自 れ 潮 む ぶ 在

2 7 鳶 0 啼 き 声 半 濁 音

秋 何 潮

澄

楠 原

幹

子

敬

甲

閉ぢぎはに

州 千 草

撮 種 さるるそこが正 を 採 る 視 力 聴 力 面 明 曼 珠 る < 沙 華

怒つてゐるやうな今年の紅 葉山

閉 ぢぎ はにふつと秋 思 0) 粉 袋

怪 獣 0) もぐ つてゐ た り 羽 蒲 寸

河 野 美 千 代

履

歴

断 崖 は 地 球 0) 履 歴 秋 0) 潮

読 お 2 似 聞 合 かせ V 0) の声 帽 子の 洩れてくる 皇 后 秋 秋 0) 簾 Щ

4 こともなげに菜は間引かれて雨催 乳 瓶 0) 底にうつすら白 い 秋

Ö

さねさし相模 大 沢

美

智 子

ń

耕二の新宿見むと高きへ登りけ 三浦三崎吟行四句

秋高し真昼の糶り場がらんどう

秋潮 のさねさし相模よく晴 ħ 7

口 箱 に 鮪 0) か ぶ と 鎮 座 せ り

1

光 三 浦 大 根 翼 張 る

海

吾 亦 紅

石 Ш 笙

児

に喧嘩 は 売 れ め 吾亦 紅

もう妻

衣被

運

は

呼ぶ

ŧ

の手

繰

る

ŧ

0)

ジオラマも芒の原にか は り あ L

芒原 出でて一気に 老 け に け り

Ш 金 0) 卵 ŧ 老 V に け り

天

0)



能村 選

濁釣秋綿竜秋地角か りり 瓶落し人がぽつんと黒くなる 菓子屋色なき風を巻いて売る 草や亀 田姫下絵いくつも提げて来る 虹 震 錐 続く太 0 かな たる川の力や秋 西 の 0) 半分をビルが に 墓掘る子がふた 古 鳴 <u>の</u> 村 き警備員 海 あ の夕焼 交 暑し くる 消 代 ŋ す す 岩 市川市

佐野ときは

手

浅沼

久男

京

能美昌二

郎

清水佑実子

脱生小節

中

の「宇宙

0)

尾にふ

れ

駿馬

召され

所

に竿一本

夜 夜 < 月

を見て月に見らるる未来都

市

電のおかげおかげとゴーヤかな

Ŧ

葉

安全

と言はるる

不安曼珠沙

華

蕉避けて通れぬ老ならば

香 芭

0

どん尻にゐ な

び

葛の花別れはいつも不意に来て

百翔びたつ刈田祝ひめ

今日 地 上 スカイツリージャックと豆の木めき晩朝 顔 の 折 日 正 し く 開 き け 冬瓜のやうなごろ寝をしてみたし 豊の秋綿噛まされて歯科にあり どの指もやさしくなりて桃を剥く 送らないでね月の兎と帰るから 赤とんぼ誰も遊ばぬすべり台 光みな真つ白になるオ の月ビル街の空広くせり 地下東京 の街 縫うて秋 り 東

京 中

東 田とも子

PDF= 俳誌の salon

七田

沖作品 15句選評

·· 能村研三

なの鳴き警備員交代す 浅沼

かなか

するというのはまさに俳句ならではの機能と思う。この平明さするというのはまさに俳句ならではの機能と思う。この平明さがある。句意も難しいことは言っておらず、何でもないの良さがある。句意も難しいことは言っておらず、何でもないのまさを平明に描いている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。かなが鳴き続けているところに、この句のよさを平凡にすくい取って、それがきちんと作品として成立のようない。

稲

光

み

な真

つ 白

に

なるオ

セ

口

能美昌二

郎

にこそ価値がある。

月を見て月に見らるる未来都市

佐

野ときは

月は昔から詩歌に雪月花の一つとして詠みこまれてきた。今月は昔から詩歌に雪月花の一つとして詠みこまれてきた。中七の「月に見らるる」という措辞が新しい月への世界観た。中七の「月に見らるる」という措辞が新しい月への世界観た。中七の「月に見らるる」という措辞が新しい月への打ち変ってきているが、探査衛星「かぐや」が日本から月へと打ち変ってきているが、探査衛星「かぐや」が日本から月へと打ち変ってきているが、探査衛星「かぐや」が明しい月への世界観を作っている。現代人の月の見かたもた。中七の「月に見らるる」という措辞が新しい月への世界観を指している。現代人の月の世界を表している。

のしい。たり万式の一つ、そのまの産事で重要で置っている。常生活における節電が私たちに求められ、様々な取り組みが行今年は節電対策としてゴーヤの緑のカーテンが流行った。日節 電の おか げ おか げと ゴーヤ か な 清水佑実子

久男

れが「おかげおかげと」という表現になった。ば、こんなに注目された年はなく、ありがたい気持もある。そ内の温度を下げる「緑のカーテン」である。ゴーヤ側から見れわれた。その方法の一つ、家の窓や壁面を植物で覆うことで室

に見えた。発想が中々ユニークである。(以下略)でいたが、窓から差し込む稲光の一瞬の閃光にすべてが真っ白競うもの。照明の消えた部屋のオセロ盤には白と黒の駒が並んように交互に駒を置き、挟んだ駒を自分の色に変えてその数を黒の二面の丸い駒を使う二人用のゲーム。必ず相手の駒を挟む黒と、立が出りでした。発想が中々ユニークである。(以下略)